

五家の莊：新体詩：文苑

著者	梨雨
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 9
ページ	5 0 - 5 4
発行年	1900-06-05
その他の言語のタイトル	五家の莊：新体詩：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5564

文苑

新体詩

五家の莊

(一)

花より花にいそがまゝ

香もとむる蜜蜂の

羽のうなりもいとねむく

谷にうたへる鶯の

えらべも聲もうるはしく

深山も今は春ふけて

霞の幕につまざるゝ

人の心の長閑さや

春ひと時の夢さめて

浮世に秋は來るども

春どこしへの五家の莊

あゝいつの世か此里の

梨

雨

人の心に風きはひ

嵐の雨のふりしきる

春は花ちる夕まぐれ

一日の業を終へ果てゝ

つどふめをどやはらからの

語るをきけばをかしやな

十戸の村に起りつる

浮世ばなしをながくど

千草色そふ秋くれば

裏の十畝の山畑に

黄める粟もみのりけり

いざからんとて若者も

乙女も稚子も野邊にゆく、
樂しからずや此秋の、

調も聲もなだらかに、
うたふをきけば一ふえの

「秋になれかし

團子^{だご}えて荷ふて、

男たづねて、くになわる。

だごもだご〜

あらもとのだご、

密であはせて、砂糖とへて。」

誰か思はん時めきえ
平氏の末のかゝらんと、

(二)

須磨の松風すごき時

月影さええ淡路嶋、

樓に遠くすみわたる

かなしき笛の一ふしや、

又 苑

きけば故郷忍ばれて

さすがにたけき武夫の

なきしきも今は昔なり、

あゝ其笛の音も絶えて

今は磯打つ浪の音

昔忍べどさえわたる。

嵯峨よ深草いざさらば

又見る時はあらえ山、

あはれかなえきわかれども、

都を後に落ちて行く

さすがやえき武夫の

にはかにくつわひきかへえ

都にのこすやまど歌、

あゝ其歌は残れども、

今はかげなき武夫や。

都にありし一族の

榮華も夢か西海の
波にゆられてよなくに、
はつかに結ぶうきゆめも
さめてはかなき舳まくら

浦より浦にさすらへば

暗にさはぐは涙のみか。

心も暗にくるひ來て

無限の思ひ無限の情

夜ごとにせまるはかなさよ。

流れくゝて今ははや

名もきかざり玄檀の浦

あはれ運命の神は來て

波にたいよふ赤旗の

暗に包むと思はへば。

長門の山に月いでゝ

さゝふ機すどき潮風に

あだの白旗ひらくと

東の空の紅も

露ひぬひまのまぼろしよ、

時は流れて人ゆきて

世々の興廢さながらに

止む時もなくき水車。

浮世の海に、ある時は

うきほさはぎてあれたちぬ、

またある時は風なきて

嵐も波の影みえず、

されどもたえずうつり行く

潮の流をやみなく

此世の岸を洗ひては、

岸の水草うちそろひ

潮にそひてなびきしよ。

あゝ恨めしき世のさまや、

されどもこの小天地

浮世の風はあれにしか、

浮世のしははさわぎしか、

峯にあらしはあれにしも。

森に雨ふりさはぎまも、

人の心はとこしへに

静かなりけりとこしへに

「治承はついで、三百年、

夢れたやかの世なりけり。

(三)

尺寸の地をひろしとて、

右に左にいそがまゝ

餌を求むる蟻を見て

笑ふを止めよ諸人よ、

浮世の風にふれもせで

谷にめぐして谷に枯る

此里人を笑ふなよ、

丈 苑

譽の前にひさまつき

黄金の前にぬかづきて

くるへる世々の人見れば、

巷に塵はうづだかく

理想の花の影あはさ

浮世のさまを眺むれば、

ゆかまからずや此里の。

けがれの塵の掩はざる

處も今はなき世なり、

あはれ昔のれもかげに

こゝのみとはに残せかまゝ、

あはれ谷間の百合の花

人の心にさけよかし。

あゝ暖き春風の

人の心にふけよかまゝ。

あゝ蕭殺の秋の風

こゝにはとはにさけよかき、

* 平家の遺民この山中にて治承の正朔を奉ずると三百年の久しきにおよべりといふ

出郷關

(一)

背戸にしげれる青梅の、

葉蔭ゆ通ふすゝ風に、

はなの櫻もうつろへば、

春こそ今は暮れてゆけ。

あゝ暮れてゆくこの春を、

なくは蝶々なれのみか。

こよひ 今夕さびしき野に立ちて、

うらみ盡させぬわが心。

(二)

看よやみ空を今飛びて、

雌雄の鳥を還りゆく。

錨山人

互みの羽搔いさめるも、

古巢に雛の待てばなり。

色香んばしき若草の、

いぶきに心亂れては、

ひねもす野べにあくがれて、

かへるも知らぬ小羊が、

夕となりて呼ぶ笛の、

柵をめぐりてひいしく時、

さすがに舊屋忘れぬも、

乳持つ母の住へばぞ。

(三)